2018(H30).12.11(火)　朝日新聞　朝刊　28 面

唾液から口腔がん早期発見

北九州市大など、新技術確立

唾液に含まれる匂い成分を用いた、口腔がんの早期発見につながる診断技術の確立に成功したと、北九州市立大と九州歯科大の研究者グループが10日、発表した。発症後でなければ確認が難しかった口腔がんの早期発見に加えて、ほかのがんへの応用も期待できるという。

研究者は市立大の李丞祐教授と歯科大の安細敏弘教授、茂山博代医員。李教授らによると、口腔がんは初期段階では症状がみられず、早期発見が困難だ。そこで、診断の指標になる物質「バイオマーカー」を見つけようと考えた。

唾液に含まれ、口臭の元になる揮発性有機化合物に注目。口腔がん患者12人と健常者8人から唾液を提供してもらい、健常者かがん患者かを区別する27の成分を絞り込むことに成功した。

成分は①健常者のみにみられるもの②健常者とがん患者に共通してみられるもの③がん患者のみにみられるものがあり、がんの進行に伴って、それぞれ消失や減少、新たな発生がみられた。こうした仕組みを明らかにしたのは世界初という。李教授は、この診断技術がほかのがんに応用出来る可能性もあるといい「今後は分析機器メーカーや総合病院などとも連携して、幅広く研究を進めることが重要だ」と話した。

安細教授は、がんを早期発見する診断技術がより良い医療につながる重要性を訴えて「出来るだけ早い時期に医療の現場で診断技術が使えるよう、研究を進めたい」と述べた。（吉田啓）

2018(H30).12.11(火)　西日本新聞　朝刊　32 面

唾液のにおいでがん診断

北九州市立大と九州歯科大開発

北九州市立大と九州歯科大（北九州市）の研究グループは10日、唾液に含まれるにおい成分から口腔がんを診断する技術を世界で初めて確立したと発表した。簡易で早期発見が可能な診断方法として期待され、臨床試験を経て、医療現場での実用化を目指す。

グループによると、初期症状が出にくい舌がんなどの口腔がんは早期発見が難しく、転移しやすい。5年以上の生存率は50％以下とされる。国内の患者は増え続け、2016年は7675人が死亡した。

研究では、唾液のにおいのもととなる12種類の揮発性有機化合物が①口腔がん患者から検出できる成分②健康な人から検出できる成分③両方から検出できるが検出量に大きな差がある成分―の3群に分かれることを特定。患者12人と健康な人8人の唾液を分析したところ、ともに9割以上の確率で判別できた。

唾液の採取は体への負担が少なく、時間もかからないため、スクリーニングに効果的という。将来的には、息を吹きかけるだけでがんの診断ができる計測機器の開発も可能となる。

研究を主導した同市立大国際環境工学部の李丞祐教授は「病気が持つ『におい情報』を明確にできたことが大きい。口腔がんに関係するにおい成分が特定できたように、肺がんや胃がんのにおいも特定できる可能性がある」と話した。（諏訪部真）